# 市民が大阪をつくる

## 新しい大阪へ　さらば維新政治

「大阪都」構想の危険性を指摘してきた中山徹奈良女子大学教授（都市計画学）が、青年グループ「民主主義と生活を守る有志」（ＳＡＤＬ）の街頭宣伝（22日）で、住民投票で大阪市解体を阻止したことの意味と、今後の大阪市の街づくりについて語りました。要旨を紹介します。

中山徹・奈良女子大教授

1万票という僅差で大阪市の存続が決まりました。ＳＡＤＬのような若い皆さんのとりくみが、大阪市を消滅から救ったと言っても過言ではありません。大阪市を残し、もっとよい大阪市にしていきたいと、若い皆さんが頑張ったことが極めて重要でした。皆さんは歴史に残る働きをしました。

### 市民分断狙う

今回の住民投票で、推進派は「大阪都」構想の名の下に、賛成派と反対派、高齢者と若者、企業で働く人と公務員、男性と女性など、いろいろな面で大阪市民を分断し、大阪市をつぶそうとしました。

これに対して、大阪市を残そうという一点で広範な市民が共同し、「都」構想をつぶしたことが今回の大きな教訓です。分断でなく、大阪市民が一つになって、どうすれば良い大阪を築いていけるか。その基礎が「都」構想反対運動の中で広がりました。

ここからがスタートでもあります。今回重要だったのは、維新が大阪市をなくすと勝手に決め、それに広範な市民が反対して、大きな運動になったことです。「誰が大阪の将来を決めるのか」が問われ、「市民だ」という答えが出たのです。

### 提案を今後も

反対した市民も、決して今のままの大阪でいいとは思っていないでしょう。でも、どこかの政党が上から案を出し、それに従えという時代ではありません。市民の考えがきちんと届かない、上からのトップダウンで下りてくる、そういう点で市民は維新の提案を否定したのだと思います。

市民が大阪をつくる主人公です。どういう大阪がいいのか、市民の側から常に提案していく、そういう働きかけを今後もぜひ続けていってほしいと思います。新しい大阪に向け、ぜひ力を出し合って頑張りましょう。